

---

# 初恋

D

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

初恋

### 【Nコード】

N9618A

### 【作者名】

D

### 【あらすじ】

クラス中からイジメにあい、孤独になっていく中で、一人の男性に恋をするお話。

## 孤独

この作品は全てフィクションです。登場人物など架空のものです。

〈初恋〉

「私、アンタの友達辞めるから」

その言葉を、親友の友達から言われて一週間がたった。私、佐倉奈央子（16歳）は、今クラス中からイジメを受けている。暴力なんてそんな所まではいかないけど、クラス中から、ひたすらムシをされ続けている。言葉はもちろんのこと目すら合わせようとしない。

「おはよう」

「・・・」

「（今日もムシですか・・・）」

いつもいつも独りぼっち。家に帰っても、自分がイジメを受けているなんて恥ずかしくて寂しくて家族には言えない。毎日毎日何事もなかったように虚勢をはって必死で作り笑顔をする自分。私に居場所なんてどこにもなかった。

そんなある日、家にチラシが届いた。それは毎年恒例の秋祭りのチラシだった。

「そっか・・・。もうそんな時期だったんだ。去年はみんなで馬鹿騒ぎして楽しかったなあ。そしたらまた私、太鼓担当かなつ。」

私の住む所には大きな秋祭りがある。町内ごとにわかれて太鼓とか笛なんかを競う。私は去年太鼓担当だった。

「でも今年はどうしよう。同じクラスの子がいるし・・・。」

行っただってまたハブにされるだけだし、行っても無駄だと思って今年には行かないことにした。でも町内会長と母が仲良しなので結局行かされるハメになった。

「ほらっ！早くしなさいよ！太鼓の練習が始まるでしょ！」

太鼓の練習は、だいたい夕方から夜にかけて3週間ぐらいかけて近所の公園のテントの中で開かれる。

「こんにちは」

「・・・。」

今度は、クラスメイトだけではなく知ってか知らずか、周りの大人たちまで私をムシするようになった。

## 出会い

「へへっ。ホントに独りぼっちになったちゃった。あたし・・・みんなに嫌われるようなことしたかな？」

私は、この生まれ育った町にでさえ嫌われた。もう真っ暗だった。全てが闇に思えた。夜、私は独り寒い中外に出た。まだ秋だというのに、真冬なみの寒さで、冷たい風が容赦なく吹き付けていた。そばにあった回転シーソーに乗り、楽譜を見ながらバチだけ叩いて練習をしていた。そんな時だった。

『ガタンツ！！』

回転シーソーが揺れた。

「ねえ！きみここで何してんの？」

私の前に一人の男性が立っていた。

「えっ？たっ・・・太鼓の練習。」

「そっかあ。音符がいっぱいでお兄ちゃんにはわかんないなあ。」

楽譜を見て、とても難しそうな顔をしていた。何だかそんな光景が私にはすごく嬉しかった。

「こんな所で練習してたら風邪ひくよ！？早く中入ろっ。そんで、お兄ちゃんに太鼓教えてくれる？」

そう言って、男性は私の手を引っ張ってテントの中につれてってくれた。

「（ありがとう）」

私は、心の中で何回叫んだだろう。もう泣きそうだった。いや、もう泣いていたんだと思う。

「きみ、名前は何て言うの？」

「奈央子。」

「そっか。奈央子ちゃんかあ。可愛い名前だねっ！」  
『ドクンッ』

私の心臓が、今まで感じた事のない変な音をだした。

「お兄さんの名前は？」

「あつ！俺？俺の名前はヒロっ。」

「ヒッ・・・ヒロさんっ??」

「あははっ！何で疑問形なの??つかヒロでいいよ！さん。なんかつけなくて」

「あつ。でも年上の方には、さん。をつけないと・・・。」

「分かった。じゃーヒロさんでいいよつ。奈央子ちゃんは歳はいくつ?」

「16歳です」

「じゅうろくうー!!!まぢ??若いなあ!!」

まるで不思議なものでも見るようにとても驚いた顔をしていた。

「お兄さんはいくつですか？」

「さて、いくつでしょう??」

「20歳?」

「嬉しいなっ♪でも残念24だよ」

「若いですね」

「いややや。逆だから。16の子に若いって言われてもね」

そんなたわいもない話をしていて色々な事がわかった。ヒロさんの家は、私の家の近くにあること。今は一人暮らしで、ホテルで働いていること。実家は酒屋さんだとか。

何でもないことだけど、話す内容なんてどこにでもある普通の内容だけど、私にとつたらとても大事なことで、ただ・・・ただ。あったかかった。ヒロさんの笑顔がまぶしくて温かくて。

私にとってヒロさんは【光】だった。

## はじめて

ヒロさんと出会ってからの私は、笑う事が多くなった。

「ヒロさんっ！こんばんはっ」

「オッス！」

ヒロさんは携帯を片手で操作しながら私に微笑みかけてくれた。

『ドクンッ』

まただ。心臓が・・・。

自分の心臓が最近おかしい。ヒロさんが笑うといつもこうなる。これって恋っていうのかな？

「おいっ！どうしたんだよ。ボウツトしちゃって。何か悩み事か？」

「ごっ、ごめんなさい。悩み事なんてナイですよ」大丈夫！」

ヒロさんはいつも私の事を気に掛けていてくれる。

でも、ヒロさんに逢えるのは、太鼓の練習の時間だけ。それにホテルの仕事だから毎日逢えるわけじゃない。ヒロさんに逢えない時間でも連絡がとれたらなあとは私は思っていた。

「あっ！そういえば、奈央子ちゃん携帯持ってる？」

「持ってますけど、あんまり使わないです。どうしてですか？」

「なら良かった」はいっコレ」

そう言うのと、ヒロさんは、おもむろにポケットから白い紙切れを差し出した。

「何ですか？これ」

「俺のケー番とアドレス」暇な時にメールして」

そこには、男の人とは思えないほど丁寧なキレイな字で、番号とアドレスが書いてあった。

夢なんじゃないかと思った。私が思っていた事が現実になったから。どうしてヒロさんは、今1番に思っていることをしてくれるんだろう？何でそんなにやさしんだろう？

私は、16年間生きてきてこの時、はじめて恋というものを知った。

人を好きになることも。そして何より人をはじめて【愛しい】と思  
った。

## 初キス

そしていよいよ秋祭りの日がやってきた。秋祭りは三日間続けて行われる。朝の部と昼の部、そして1番の盛り上がりを見せる夜の部の3構成になっている。朝と昼は町内をまわり、夜の部は市内をまわる。

ヒロさんは朝早くから、祭りの準備にかりだされていた。

「おはようございますっ」朝早くからご苦労様です。」

「おはよっ」もう俺は眠たくてしょうがないよ。あっ!!そうそう奈央子ちゃんは太鼓でしょ?」

「はい。そうですけど、それがどうかしましたか?」

「俺、みこしを運転する事になったから奈央子ちゃんの隣にずっといるよ」

「えっ?本当ですか!?」

「ほんとっ!」

「じゃ」気合入れて太鼓頑張りますっ」

私は、嬉しくて嬉しくて今にも飛びあがりそうな気持ちでいっぱいだった。こんなに幸せが続いていいんだろうかと心配もした。

『ありがとうございましたっ!!』

みんなで、みこしや神社に向かつて大きな声でお礼を言う。これは三日間無事に、お祭りができたことに神様に感謝をする閉めのあいさつ。

「奈央子っ」三日間お疲れ様っ」

ヒロさんが一人休憩をする私のもとにやってきた。

「えっ?あっ!おっお疲れ様です」

私は、ヒロさんに初めて呼び捨てにされたので嬉しいかったけど、ちよつと突然だったからビックリした。

「あっ!やっぱ呼び捨てダメ?」

「全然そんなことナイですっ。」

「良かった。じゃっ今日から奈央子でっ」

「はっはい。」

私はその時下を向いていたけど、顔が真っ赤だった。

「これ飲む？」

不意にヒロさんが差し出したのは、まだ飲みかけの温かい缶ジュースだった。

「いつ。いただきます」

「（あっ！ヒロさんとはじめての間接キスだっ♪）」

心の中でそんなことを考えていた。

「あっ！！今ので俺と奈央子間接チューだぁ♪♪」

その言葉に驚いて私は、嘔いてしまった。

「なっ！何言ってるんですか！！からかわないで下さいっ！」

そんなことを言っちょつと怒ってみただけど、ホントは心の中はドキドキだった。

## 幸福

私が、1番安らげる場所はヒロさん以外に考えられなかった。でも、秋祭りが終わればそれもおしまい。メール交換や電話はできるけど、逢えない・・・。

学校でのイジメはまだ続いていた。最近の前よりひどくなってるような気がした。前はムシだけだったのに、最近私の教科書やノートが無くなっている。

「(どうしよう。新しい教科書買わないといけなくなっちゃう。ヒロさんに逢いたい。逢いたいよっ!)」

そんな時だった。

「ハイっ。これ」

いきなり、クラスメイトの女子が私に手紙を渡してきた。

「あっ。あたしに?」

「そうだよ!? 開けてみて?」

そう言われ、私はもしかしたら仲直りにの手紙かも。と思って急いで開けた。中にはこう書かれていた。

「死ね」

たった2文字で、人は人を殺せる……。心が死んでいくのがわかった。

気づいた時には私は、教室を飛び出していた。もう死のう、死のう、心の中で何度もつぶやいた。

「ヒ・・・ロ・・・さ・・・ん。」

そして最後に思ったのは、ヒロさんのことで、自分が死ぬ前にもう一度声が聞きたった。聞いた。

『トゥルルルトゥルルルトゥルル』

電話音が耳に響いた。

「もしもし?」

「奈央子? どうした?」

「ヒロさんの声が聞きたくなっただんです・・・。」

「俺の声でいいなら、なんべんも聞かしてやるけど、それにしても何かあったのか？声暗いぞ??」

「あのね？聞いてもいい？」

「うん。何でも話してみ。」

「よく、人は意味を持つて生まれてくるって言うけど、私・・・間違つて生まれてきたみたい！私生まれてきた意味なんてないっ！！もう・・・生きるのに・・・疲れた。」

本音をぶつけた。ヒロさんには全然関係ないことなのに、つい、声を荒げてしまった。涙が止まらなかった。

「じゃー聞くけど、奈央子はこの町で、あの公園で、あの日あの時、俺に出会ったことにも意味がナイのか？笑つて、怒つて、そんな楽しい思いでも、俺との思い出も奈央子は全部否定するんだな！！？」

「ちつ違う。そう言うんじゃないくて・・・。」

「違うないよ。奈央子が言ってるのはそう言うことだよ。」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

沈黙が続いた。先に口が開いたのはヒロさんだった。

「公園に来てみな？」

「公園？」

「そう。奈央子と初めて逢った時の公園。」

「わかった。」

気がついたら学校の授業は終わつていて、掃除の時間になっていた。私は、掃除の時間をサボり、校門から走り去るようにして出ていった。私のいる学校から公園までは、歩いて20分ぐらいの所にある。公園に何で行かなきゃいけないんだろう?! いったって何にもないのに!!

そう思いながら、ゆっくりゆっくり歩いて行つた。20分の所にあるのにゆっくり行つたせいで倍の40分かかってしまった。歩いている間に、手紙の事を思い出して悔しくて悔しくて、私の顔は涙と

鼻水でグシャグシャになっていた。

入り口を通りぬけたら回転シーソーが見えてきた。そこに人が立っていた。

「どう・・・し・・・て・・・。」

ヒロさんだった。

「コラッ！遅いぞ。何十分待たせるつもりだ！？」

「えっ！？どうして・・・仕事なのに・・・。」

「おいで。」

ヒロさんは、優しくそう言うと、両手を広げてにつこり笑った。私は、おもいきり抱きついた。

そしておもいきり泣いた。

「よしよし。奈央子は今まで一人で良く頑張りましたっ！！偉かったよ♪でもこれからは我慢しないで俺の所においで？」

その瞬間、これ以上にないかっていうぐらいの涙がでた。そしてヒロさんは優しく抱きしめてくれた。

きっと、この人には言わなくても全部おみつしなんだ。私が今、学校でどんな目にあっているのかも。全部、全部わかってるんだ。

イジメられて独りぼちな私なのに、そうわかっていながらもヒロさんだけは、私に手を差し伸べてくれた。

温かくて、優しくて、ホントに太陽みたいな人だった。

私はそのまま眠ってしまったらしく、起きた時にはもう夜になっていた。ベンチでヒロさんに膝枕されながら眠っていた。そんな時でもヒロさんは文句もいわず。ずっとそばにいてくれた。

「ごっつ！！ごめんなさい！！あたし、つい、眠ってしまったみたいで。」

「全然平気だよ♪」

『チャリラッチャリラッ』

ヒロさんのポケットから携帯の着信音がなりだした。ヒロさんは携帯を取り出し、サブ画面をみてバツが悪そうな顔をしていた。

「あっ！！やっべ！仕事先からだ。ちょっとでてくるね。」

そう言うところと離れた所にいき電話にでていた。私は心配になつて近づいてみると。

『どうもすみませんでしたっ』とひたすらぺこぺこ謝っている姿が見えて、心が痛くなった。

そして、電話を切るとまた笑顔で私のもとに帰ってきた。

「あの・・私なんかのために、仕事サボらせちゃってごめんなさい」

「いいのっ!! 奈央子は悪くないよ! 俺が勝手にしたことだからっじゃっそろそろ帰りますか。」

「はいっ!!」

帰りは二人で手を繋いで帰った。途中で自動販売機で温かいレモネードを買って二人でまわし飲みしながら行った。家の近くまで来た所で立ち止まった。

「あの、ここまでで大丈夫ですからっ送ってもらっちゃって今日はホントにありがとうございました!!」

「ここまででいいの?」

「はいっ。もう十分です。私、明日から頑張りますっ!! おやすみなさい」

そういつて私は後ろをむいて行こうとした時に、呼びとめられた。

「ちよつと待つて。奈央子目つぶって」

「えっ? 何ですか??」

「いいからっ! 早く」

「こっ。こうですか?」

「はいっ、おやすみのキスッ」

『チュッ』

温かくて柔らかいものが、私の唇に触れた。

それがキスだと、頭が理解したのは、数分たってからだった。

それは、私にとって初めてのちゃんとしたキスだった。

「えっ! あっ! あの」

みるみるうちに顔が真っ赤になって、私は拳動不審になっていた。

「じゃっなあっ、おやすみ」

そういいながらヒロさんは帰っていつてしまった。

「どっ。どうしよう！……！」

戸惑って、歩いて、ボーっとして、電柱にぶつかったけど無事に家に帰ることができた。

そして、何だか元気が出てきた。

「もう負けない！！強くなってみせる！二度と泣いたりしない！！」  
私はそう心に誓い、明日から本気で頑張ろうと思った。

ベットに入って今日1日を振り返ってみた。今日私が1番に思ったこと……それは……

「初めてのキスはレモンの味って、あれホントだったんだ」

## 衝撃

次ぎの日、私は、自信と強気にみちあふれていた。

「大丈夫！！ヒロさんに勇気をもらった！！もう・・・泣かない！！」

足取は軽かった。きっと自分の中にあつたネガティブなものが全部消えていたからだろう。

今日で決着をつけるつもりでいた。クラス中に、今、私が思っていることをみんなに言おうと思った。

「おはよっ！！」

「・・・。」

今までの私とは違う！！こんな事でめげたりしない。

私は、教壇の上に上がった。

「みんな聞いてっ！！」

叫んでみたけど、誰も聞いてはいなかった。私は、だんだん腹が立ってきて、ついに

「お前等！！人が聞けって言っただから、聞けよコラア！！」

みんなビックリして、私のほう一斉に向き、目が点になっていた。でも1番ビックリしたのは、自分自身だった。どこで覚えたのかもわからない。こんなヤンキーみたいな言い方をしたのは、生まれて初めてだった。

「何で、みんなが私をイジメてるのかわからない。私にイヤなところがあるなら正直に言っしてほしい！！」

そう言うと、私の親友だった子が一人、私のそばにやってきた。

「ごめんね。」

それだけ言うと、その子はその場に座って泣き出してしまった。嬉しかった。やっと、やっと、仲直りできたような気がした。私もつられて泣き出してしまった。

最後は、みんなで仲直りして、また一緒にみんなで笑って楽しい1

日になった。帰りも久しぶりに親友と帰って、今まで話せなかった事もふくめて、いろんな話をしたけど、話きれなくて家に招いて私の部屋で話した。

私は、親友にヒロさんのことも話した。

「そつかあ。奈央子恋してたんだっ！！応援するから何でも相談してね。」

そういつて30分くらい話して、親友は帰っていった。

「あっ！！そうだ！このことヒロさんに報告しなくっちゃ。」

私は、急いで携帯を鞆から取り出し、電話をかけた。すると・・・  
「もしもし？どちら様ですか？」

女の人の声だった。

「あつ。あの・・・ヒロさんは??」

「ヒロなら、今、お風呂よ。お名前は？急用??」

「あの、奈央子と言いまして」

「あらっ！あなた奈央子ちゃん??いつもヒロから奈央子ちゃんのお話きくのよ??俺に妹ができたって、ほら？あの人世話好きでしょ??」

ショックだった。私は、ヒロさんにとって妹だったんだ・・・。

「あの、失礼な事を聞くようですが、ヒロさんとは、どういったご関係で??」

「えっ!??ヒロから聞いてないの??私達来年の春に結婚するのよ??」

結婚・・・。

「(ウ・・・ソ・・・)」

『ガチャン』

電話を切った。何も考えられなくなって、無理やり切った・・・。  
今までヒロさんが私にしてくれた事は、いったい何だったんだろう??

あのキスは、まぼろしだったのかもしれない。

私は、次ぎの日学校を休んだ。イジメられてた時だって休んだこと

な  
か  
っ  
た  
の  
に  
・  
・  
。

## デート

『ジリリリリッ』

朝だ。私の耳元で目覚し時計が鳴り響く。

「うるさいなあ」

そう言っただけは、そばに置いてあった目覚し時計を止めた。時計の時刻は7時半をまわっていた。学校には十分に間に合う時間だが行く気にならない。

「今日も休もう・・・。」

学校を休んで、もう4日になる。クラスの友達からは毎日メールがはいってくる。友達全員にちゃんとメールを返し、今は風邪で休んでいるという事にしてある。もちろんヒロさんからもメールや電話は毎日のようにくる。

「奈央子??電話くれたよね?ごめんね。でなくて。奈央子から返事がないので心配してます。連絡下さい。」

でも私は返さないし、電話にも出ない・・・。

ヒロさんには彼女がいて、それも来年の春には結婚するのに・・・。それがショックだった。

今まで色々してくれたけど、それが妹としてみていられた事にもショックだったし、何より1番辛かったのは、キスひとつで舞い上がっていた自分自身に、1番情けなさを感じて辛かった・・・。

そしてその日は、1日中を寝て過ごした。何も考える気にはなれなかった。ヒロさんの事を思い出すのが怖かった・・・。

次ぎの日、私は携帯の着信音で目が覚めた。サブ画面を見ると、電話はヒロさんからだった。

でも私は電話には出なかった。ちょっと経ってからようやく音が止まったので画面を開くと留守電のマークが出ていたので、留守電ボタンを押した。

「もしもし!?!何回もごめんね?でも、どうしても今日は、奈央子

に逢って話したい事があるから。今日の夕方5時に、奈央子の家の近くの神社の駐車場で待ってます。」

正直すごく悩んだけど、ヒロさんの事だから、私が行くまでずっと待つてると思ったから行くことにきめた。

その日は、朝から曇りで、気温が低く肌寒かった。私は、したくをしてちよつと早めに家を出た。

駐車場に着くと、ヒロさんに着きましたというメールを送った。すると

『プップー!!』

車のクラクションが鳴り、駐車場から1台の車が私の元にやってきた。

私の前で止まり、車の窓が下りていく。

「来てくれたんだね」

中からヒロさんがニッコリ私に微笑んだ。

「私早く来たんですけど、ヒロさんいつからここにいたんですか?」

「一時間ぐらい前かな?」

「ええー!!何でもつと早くに言わないんですか!!電話してくれればスグきたのに・・・」

「いいよ。別に。俺は早めにきたけど色々する事があつたからちよつどいいのっ!!」

そういつて私はドアを開き、助手席に座った。何だか恥ずかしかった。男の人の車に乗るのは初めてで、ヒロさんの香水の匂いが私の鼻をかすめて、ドキドキした。

「あつ!!話つて何ですか??」

「ウソ」

「えっ!?!」

「だからウソだよっ」だつてこうでもしないと奈央子来てくれないと思つたから・・・」

「ひつどーい!!じゃあ私帰ります」

シートベルトをはずして帰ろうとした途端に、車が動きだした。

「ちよつちよつと。何するんですか！！私帰りますっ！」

「だあくめっ♪今日は奈央子とデーとするんだから」

その一言が嬉しくて帰る気がしなくなつて、助手席で運転をするヒロさんの横顔を私はずっと眺めていた。今日のこの日だけは、ヒロさんを私の恋人にして下せいと・・神様に祈りながら・・。

## 涙

車は私を乗せて2時間、ずっと走ったままだ。

「ねえ、ヒロさんまだ着かないんですか？さつきから走ってますけどまわりは山ばかりだし、何処向かってるんですか！？」

「ヒ・ミ・ツ」

あたりはもう暗かった。それに人気もない、でもヒロさんは笑顔でタバコを吸いながら運転している。

それから30分ぐらいたったころだろうか。急に車が止まった。

「お待たせっ」到着っ！！」

車をおりてまわりを見たが何もない。コンクリートの駐車場に林があるだけの場所。

「あの……。何にもないんですけど……。」

私がつまらなさそうにいった。すると

「どこみてんだよ。こっちこっち！」

ヒロさんに手を掴まれ引つ張られた。そして林の横にあった細い道を通ってゆく。

木を避けながら走っていくとヒロさんがいきなり止まって私はヒロさんの背中に顔をぶつけてしまった。

「いったあゝいつ。いきなり止まらないで下さいよ！あぶないじゃないで」

「ほらっ！！みてごらん」

言葉をさえぎられ、見てみると

「わあああああ！！！！キレイッ！！」

そこには大きな湖があつて、月明かりに照らされながら水面が光っていた。町がすごく小さくて灯りがついているから、まるでろうそくみたいになつて赤や緑や黄色やオレンジ色に光っていてそれが湖をおおつてとても言葉では言い表せないほどにキレイだった。

「ここ俺のヒミツの場所なんだっ」

ヒロさんは笑顔で私にそつと囁いた。

「奈央子さつ！！何かあっただろ？俺の電話にもでないし学校も休んでるみたいだし。何かあるんだつたら言えよ！また前みたいにな人で抱えこもうとするなよ！！」

急に真剣な顔つきになって、私の目を見つめてきた。私は怖くなつて話をそらそうとした。

「なつ何急に！今日は話なんてなかったんじゃないんですか！？別に悩み事なんてありませんよ」あつ！！そつだこの間」

「言つてごらん？？」

また話をさえぎられた。今度は優しい顔で言つてきた。

「だからナイつてば！！！！」

「ウソつくなよ。奈央子はウソつく俺の顔見ないんだよ？？知つてた？」

だつて・・・言えるわけじゃないじゃん！！来年結婚するの？？とか私のこと妹として見てたの？とか妹なら何でキスしたの！？とか・・・そんな馬鹿らしいこと自分の恥じをわざわざさらすような事いえるわけがなかった。それにヒロさんの口から妹みたいな存在だつて言われる事が恐ろしかったから。聞きたくなつた。

「俺は奈央子のそんな無理した笑顔見たくないな・・・。」

切ない悲しそうな顔でつぶやいた。その時心の中でやっぱりヒロさんにはかなわないなあゝと思つた。

「あのね・・・ヒロさん来年結婚するんでしょ？」

「えっ！！」

ヒロさんは一瞬ビックリした顔をしたけどすぐに真剣な表情に戻つて「うん」

とだけ答えた・・・。

私の目から熱いものが顔をつたつた。それが涙だと気づいたのは数分たつてからだつた。



二人で・・・

「誰から聞いたんだ??その事・・・。」

「ヒロさんの彼女からだよ。前に電話かけた時に、彼女が電話にてそう言ってた。」

「そっか・・・。」

そう言うヒロさんは何だか悲しそうな顔をして、湖を見つめていた。

「あのっ。ひとつ聞いてもいいですか??」

「何?」

「ヒロさんにとって私って妹??」

「う・・・ん。俺の可愛い妹だよ。」

「じゃあ何でキスしたの!!ヒロさんは妹にキスなんてするの!?!」  
私は大声で叫んだ。

「・・・ごめん・・・。」

ボソッとつぶやいた。

「何!?何がごめんなの?!私はヒロさんの事が好きだった。好きで好きでどうしようもなくて

、私が学校の事で悩んでる時にヒロさんだけが私に手を差し伸べてくれた!だからキスしてくれた時は嬉しくて嬉しくて、もしかしたら両想いなのかな?とか考えちゃったりして・・・。なのにヒドイよ!!」

私だけ一人舞い上がって馬鹿みたいじゃん!!好きじゃないんならキスなんかしないでよ!!!!」

いっぱいいっぱい叫んで、暴れた。

でもヒロさんは、そんな私を力いっぱい抱きしめてくれた。

「ヤダッ!!離してっ!!ヒロさんなんか大っ嫌い!!嫌い!!」

泣き叫びながら、ヒロさんの腕を離そうとするが離せなかった。力が強かった。

「嫌い……。やだあああ。」

「ごめん……。ごめん……。ごめ……。っ。」

私のおでこに水滴が落ちた。見上げるとヒロさんも泣いていた。何でヒロさんまで泣いてるのかわか

らなかったけど、二人で抱き合いながら……。ただ……。私たちは泣くことしかできなかった。

## 告白

その日は夜風がいように冷たくてより、ヒロさんの体温を肌で感じられた。

入ってこんなにも温かいんだと初めて知った。私が泣き止んで上を見上げて

まだヒロさんは、泣いていた。

「もう・・・泣かないで？どうしてヒロさんが泣くの??」

「ごめつ・・・男のくせにカッコ悪いな。」

「そんな事ないよ。ヒロさんはカッコイイよ♪キムタクみたいっ!」

「ハハッ!!何それ!けなしてんの!？」

「違いますよっ!!私にはキムタクよりカッコよく見えますっ♪」

「何か複雑な気分だけど、でも、ありがとっ」

いつしか二人とも、さっきまで泣いてたのに、笑って話せるようになって、私も

何か馬鹿らしくなって、ヒロさんに出会えた事に感謝しなきゃと思うようになってた。

「奈央子っ!!」

「なっ・・・何!?急に」

ヒロさんが私の肩を大きな手のひらで、ギュッと掴んだ。

「俺っ・・・」

「オレ??何??」

「お前の事が好きだっ!!」

「えっ!?!じよっ・・・冗談やめて下さいよ!!私怒りますよ!!」

「冗談なんかじゃないよ!!本気で好きなんだ!!」

それは、あまりにも急すぎる告白。私は、嬉しかったけど、死ぬほど嬉しかった

けど、頭の中は真っ白だった。

「だって彼女いるじゃないですか!!!」

「アイツとは別れる。」

「ホン・・・ト・・・に??夢じゃ・・・ナイ・・・よね!??」

「馬鹿っ!!夢で終わってたまるかよ!!」

ヒロさんが今まで見たことのない笑顔で、私の頬を指でつねった。  
こんな笑顔もするんだとトキメいた。

「痛いっ!!そんなに、つねらないで。」

「あっ!!ごめんごめん」

「ヒロさん??」

私は、可愛いらしくヒロさんの名前を呼んだ。

「ん?何??」

「世界で1番だぁいスキッ!!」

思いきり抱きついた。そんな私をヒロさんは優しく頭をなでてくれた。

今まで生きてきて1番幸せな時間だった。

## 初夜

「俺もだよっ」

しばらくの間、抱き合っていた。そして少し離れて先に口を開いたのは私の方からだった。

「ねえ、あたし・・・今日は帰らない。ヒロさんと一緒にいる」

「ばっ馬鹿！！そんな事できるワケねえーだろ！！」

「どうして??」

ヒロさんの顔はみるみるうちに真っ赤になって咳ばらいをした

「俺だつて男なんだ・・・その・・・えっと・・・りっ・・・理性というものが・・・」

りっ? 理性つてわかるか?? そのエッチなことなんだけど・・・。

奈央子に嫌われたくないし・・・」

「わかつてるよ。そんなの。もう高校生だよ?！」

「そっか・・・そうだよなあ」

と、顔が引きつりながら笑おうとしていた。

そんなヒロさんが愛しくて愛しくて、私はこう言った。

「あたしをヒロさんのものにして下さいっ!」

私はヒロさんのお腹あたりに手をまわして力いっぱいしがみついた。

「ホンとにいいのか?」

静かに私の耳元で囁いた

そこで私はコクンツとだけうなづいた。

二人で手を繋ぎながら車でホテルへと向かった。

車内は沈黙でなぜか口を開ける雰囲気ではなかった。

山道を20分ぐらい走っていくとやたらと大きい西洋風の建物が見えてきた。

「(どうでしょう!! ホンとに来ちゃったよ!!)」

自分で言ったにもかかわらず、内心焦っているから手が汗ばんできて、

私は完全にパニック状態だった。

そんな状況にヒロさんは気付きもしなく、とつと車から降りてフロントにいった。

フロントから鍵をもらい、そのままエレベーターに乗り部屋へとむかった。

部屋に入ると、いきなりベットに追いやられ

私はベットに倒れるようにしずんだ。そこに上着を脱いで上半身裸になった

ヒロさんがのしかかってきた。

「ちよっ！ちよっと待ってえ！！」

と叫んでみたけど、ヒロさんはただ黙って私の制服のボタンをひとつひとつ

はずしていく。ヒロさんの手は震えていた。

「ばっ！！馬鹿みてえ！！大の男が焦ってやんのっ！ハハッ！カッコ悪うー」

苦笑いしながら、震えた手で制服を脱がそうとしたとき私はヒロさんの手を

握りしめて、自分から全部脱いでヒロさんを抱きしめた。

そのまま二人でベットにうもれて肌を重ねあわせた。

ヒロさんは汗ばんだ身体で私を抱きしめながら・・・

「奈央子っ・・・っっ・・・愛してるっ」

とつぶやいた。

朝、私が目を覚ますとニッコリ笑いながら横で頬杖をしながら私をみていた。

「ヤッ！寝顔なんかみないでっ！！」

と、私はかぶっていた布団を顔の上まで持ってきた。

「何で隠すんだよ！！可愛いのにっまっ！！昨日の夜の奈央子が一番可愛かった

けどねっ」

そういうと、ヒロさんは自分の人差し指を私のホッペにツンツンとつ

きたててきた。

「もう！！ヒロさんのスケベッ！！変態っ！！」

「あははっ♪ ひっでえっ！！仮にもそれが恋人にいうセリフかよ」  
これがヒロさんと私の最後の夜になろうとは・・・。  
この時想像もつかなかった。

## 初夜（後書き）

長々とお待たせして申し訳ありませんでした。最終話まであと少しです。なにとぞお付き合いくださいませ。  
これからまめに更新していく所存でございます。

## 悪夢

二人はホテルから出て、駐車場に止めてあつた車に乗りこんだ。

ヒロさんは私を家まで送ってくれた。車を私の家の近くの駐車場にとめて

窓ごしに話をした。

「奈央子、今日学校は？」

「今日は、家庭学習日だから学校はお休みだよ」

笑顔で私が答えると、ヒロさんは真剣な顔つきになり数秒の沈黙のあと

重たい口をひらいた。

「そっか……。俺、今日遅番だから帰りは夜中になるんだけど彼女に話すわ」

あたしの中は複雑だった。ヒロさんのことは大好きで一緒にいたいけど……。いけど……

そしたら今まで一緒にいた彼女は……。

そう考えると素直に喜べない自分がいた

「う……。うん。ヒロさん彼女のことホンともういいの？」

「アホかっ！！何言つてんだよ！？奈央子は俺と付き合いたくないのか？」

「ちっ。違うよ……。そう言うんじゃないくて……。」

「心配するなっ！！俺が今一番愛してるのは奈央子だけだ！だから俺はアイツとは別れる

。今日夜中になっちゃうけど、ちゃんとお前に報告するから待っててなっ」

「うんっ。わかった。」

そう言うと、車にエンジンをかけ行ってしまった。

不安でいっぱいだった。家に帰っても私はずっと携帯をにぎりしめていた

その日1日はご飯が喉にとおらなくて、携帯を開けては閉め開けては閉めの繰り返し……。

そんな中時間はどんどんすぎていき時計は夜の12時をまわっていた。

「まだかなあ。ヒロさん大丈夫かな……。」

待っていてもいつこうに返事がこないなので私はお風呂に入ることにした。

お風呂に浸かりながらヒロさんを考えていた。そしてそのまま私の意識がとうのいていった。

『バシヤッ』

気がつくとお風呂のお湯は水にちかくなっていて時計を見ると早朝の4時だった。

「わっ!!どうしよう!!」

急いでお風呂を出て洋服を着て、携帯の置いてある自分の部屋にいった。

携帯をみると青く光っていた。

「あっ!!メールだ。きつとヒロさんからだ」

携帯を開けると、そこには新着メッセージとかかれてあり中を開くとやっぱり

ヒロさんからのメールだった。時間は1時半。私がお風呂で寝ていた時間だった。

メールを見るとそれは短いメールだった。

「やっぱりお前とは付き合えない。短い時間だったけどありがと。もう逢うこともないと思う」

けど楽しかったよ。さようなら」

『ガタンッ』

まるで壊れた玩具のように私は床に崩れおちた。

「(こんなの嘘だ……。嘘に決まってる。だって私のこと愛してるっていったもん。」

1番だって……。ウ……。ソ……。だよ!!!)」

心の中で何度も思った。あのヒロさんが帰り際にアタシに言った言葉。

「1番愛してる」

私は急いで電話をした。

『・・・ただいま電波の届かないところにおられるか電源が・・・』  
電源を切っていた。

ますます不安がよぎった。でも震える手を動かしながらメールをうつた。

「嘘だよね？ちゃんと話きたいです。返事待ってます。」

そして送信ボタンを押して、送信完了しましたの文字が見えると携帯を閉じた。

「（お願いっ！ちゃんと見て）」  
祈るように携帯をギュッと握った。

その日は、ひたすらメールを送った。

結局、その日ヒロさんから返事が来る事はなかった・・・。

## 悲しい現実

次の日の朝、私は学校を休みヒロさんの実家の酒屋さんに向かった。同じ町内なのでそう遠くはなかった。公園と駄菓子屋さんの前の通りを15分ぐらい

歩き、交通指導員の置物が置いてある交差点を右に曲がると、そこには小さなお店が見えてきた。

私は、お店のドアの前で小さく深呼吸した。

不安はいっぱいあった。あのメールが本当だったらどうしようとか、お前なんかいらなんて

言われたらどうしようとか、考えるとマイナスなことばかりが脳裏をよぎる。

「きつと大丈夫!!」

そう自分に言い聞かせ、ドアを開けた。

『ガラガラガラ』

「ごめんくださあ〜い」

そういうと、店の奥から中年の女の人が出てきた。

「いらつしやい」

私はゴクツと息をのみ小さな声で言った。

「あの〜こちらにヒロさんはご在宅でしょうか？」

「どちら様かしらっ？ヒロなら昨日から帰ってないわよ。」

「あつ！あの申し遅れました。私、町内の秋祭りの時にお世話になった佐倉奈央子と申します」

お辞儀をすると、女の人はニコリと笑い

「どうもご丁寧に。あのドラ息子どこ行っただか!!フラフラして！一回お灸を

すえてやらないと!!」

その女の人はヒロさんのお母さんだった。

「あつ！あの何時頃もどられるかわかりますか？」

「さあ、何しろあの子は親にあんまり連絡よこさないからわかんないねえ。」

伝言あるなら伝えとくよ？」

「すいません。たいした用じゃないので失礼しますっ。」

一礼して私はお店を飛び出した。

50mほど走って近くにあったベンチに座りどうしようか考えた。

仕事場に行こうとしたがどこにあるのかわからないからヒロさんが実家に帰ってくると

思いヒロさんの家の駐車場で待つ事にした。

1時間・・・2時間・・・3時間・・・。

時間は刻々と過ぎてゆく。そしてとうとう夜になってしまった。朝から出かけたのであまり厚い格好をしていなかったために身体はどんどん冷えていった。

それでもヒロさんのことを思うと家には帰れなかった。ただひたすら待った。

すると夜の11時過ぎ、遠くの方から一台の車がやってきた。見覚えのある車だった。

ヒロさんだった。駐車場の線どうりにきれいに車を止めると車からおりて鍵を閉めると

立ち止まり煙草をすいはじめた。

私は駐車場の隅から出てヒロさんに声をかけた。

「ヒロさんっ!!」

バツと後ろを向き、私をみて一瞬驚いた顔をしたが今まで見たことのない冷たい顔をして私の前まで寄ってきた。

煙草を吸って空に煙をスウーっとはくと口をひらいた。

「何でここにいるの?メール送ったんだけど」

「うっ嘘だよね!?冗談だよね??」

「冗談なんかじゃねえよ!!!もうお前の事キライなんだよ!!!う

ぜえゝし

お前とのセックス気持ち良くもななんとなかったし！！もう用済みなんだよ！！」

信じられなかった。前にいる人は誰？？ヒロさんはあんなこといわないよ。

目の前が真つ暗になった。どうして？？どうして？？

私はその場に崩れ落ちた。全身から力が抜けていく気がした。

「ごめんね。あたしが悪いんだよね？？ごめ……ん……ね……」

目から涙があふれてきた。

するとヒロさんが両手でガバツと抱きしめた。

「馬鹿野郎っ！！何でだよ！！何でそうなるんだよ！！悪いのは全部俺じゃねえゝか

お前はちつとも悪くねえゝんだよ！！俺のことキライになれよ！！何言ってんだよ！！って俺の

こと殴れよ！！！！こんなに身体が冷たくなるまで俺なんかのために待ってたのかよ。」

ヒロさんの目からも涙がでていた。

私はコリと笑い

「へへっ。無理だよ。だってヒロさんのこと大好きだもん。キライになんて

なれるわけないじゃんっ」

ヒロさんは少し照れ笑いをして

「馬鹿っ」

と囁いた。私をおんぶして近くのベンチまで運んでくれると自分の着ていたジャケットを

私の背中にかぶせてくれた。そして私の横にヒロさんが腰をかけた。

「お前には本当のことを言っよ。ごめんな」

「うんっ。」

「昨日、奈央子と別れたあと仕事に行ったら携帯に電話があった。

彼女からで、電話に出ると」

「あつ！！もしもし？ヒロ！！ビックリするニュースがあるの！！  
今日仕事終わったら家に

寄ってね。」

「ちょうど良かった。俺もお前に大事な話があるんだ。」

「そっ！？わかった。じゃあ待つてるから。」

「で、仕事が終わったからアイツの家に寄ったんだ。」

「ヒロっ、お帰りっ！！お腹すいてる？？ご飯作ってあるよ」

「いらないっ。それで話って何？」

「ふふふっ、お腹にねっ。ヒロと私の赤ちゃんがいるのっ」

私の頭に、赤ちゃんと言う言葉がこだました。

「えっ！！嘘だろ」

「嘘じゃないわよ！！どう？？ヒロ嬉しいでしょ？？」

「あつ！！あー。」

『ドカッ』

突然ヒロさんがベンチからおりて私に土下座をした

「ごめんっ！！ホンとにごめん！！もう俺のこと殴っても蹴っても  
いいから！！

アイツには赤ちゃんがいて、俺はおろせなんて言うことは出来ない。  
アイツを

独りにさせたくないんだ。アイツ昔一度流産してるから今度こそ産  
まないと！！・・・その・・・」

「やめて？？もう顔あげて??」

私はしゃがんでヒロさんを抱き上げようとした。

「ホンとにごめん！！」

「いいんです。わかりましたから。」

頑張って頑張って、言ってみてけどダメだった。涙が止まらなかった。

やっぱり悲しかった。変に大人ぶって虚勢をはって、もういいんです。って

カッコ良く言いたかったけど自分に嘘はつかなかった。

## 最終回

気がつくと私は自分の部屋にいた。

どうやって帰ってきたのかわからない。

ただ覚えている事は…。ヒロさんとお別れをした事…。

涙がでてこない。

泣き過ぎて涙は枯れてしまった

でも次の日から私は学校に行った。

何事もなかったように

笑顔で毎日をすごしていた。

何カ月かたった頃

私あてに手紙が届いていた。

差出人をみると

hiroと書かれてあった。

私は急いで手紙をあけると…

そこには一枚の紙と写真が入っていた。

手紙の内容は実に淡々としていた。

どうやらヒロさんはあの後、地方に引越しをしたらしい。

今はそこで奥さんと産まれてきた赤ちゃんと3人で暮れしてるみたいだ。

写真を見るとヒロさんと赤ちゃんが笑っている。

写真の裏をみると文字がかかれてある。

この世で最も愛した女性の名前を子供の名前にしました。

この子の名前は奈央子です。

私は声をあげて泣いた。何だか自分でもよくわからなかったけどただ泣いた。

涙がとまらなくて

私はただただ泣いた。

私はもう二度と恋はしない。

私が愛す人はあなたただだから。

初めてキスをした人

初めて人肌の温かさを教えてくれた人。

初めて身体を重ね合わせた人。

初めて愛しいと思えた人

私の初恋の人…  
きつと

またあなたに出会える

生まれかわっても

また私はきつとあなたに恋をする

今度は…

あなたのお嫁さんになるために

ヒロさん…

大好きだよ  
♪

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9618a/>

---

初恋

2011年2月11日07時16分発行